動向

アラビア半島の考古学研究会（2000年）

佐々木達夫・佐々木花江

西アジア考古学、とくにアラビア半島考古学に関する2000年に開催された研究会を紹介する。1997年、1998年に開催された同様の研究会についてはすでに報告し、研究会の形態等も比較した（佐々木 1998）。今回は2000年7月にロンドンで開催された3つの研究会の発表を取り上げる。Historic Oman, Seminar for Arabian Studies, The Archaeology of Bahrain である。いずれも発表資料の配布はない。メモを取った発表については内容概要を記す。なお、オクスフォードでARAM研究会も開催されたがHistoric Omanと開催日が重なった。2000年7月に金沢で開催されたヘレニズム～イスラーム考古学研究会は次の機会に紹介したい。

◆ Historic Oman: Cultures, Contacts, Environment（7月17-19日　大英博物館）

30年間にわたるAnglo-Omani協会の活動やオマーンの歴史研究の成果を発表する会。以前は研究上空白の地であった。イラク・イラン戦争、湾岸戦争で研究者がメソポタミアからアラビアに移り、もはや、オマーンは研究上の空白地ではなくなった。

Miss Beatrice de Cardi (London): British archaeology in Oman: the early years

オマーン考古学調査黎明期の概観を行った。ドゥカルディは1968年に初めてオマーンの湾岸地域考古学踏査を行い、1970年には外国人として初めてムサンダム半島で考古学調査を始めた。カサまでは陸路もなく船で行った。その頃の踏査で多くの遺跡が発見された。紀元前3千年からポルトガル時代まで、あるいは中国陶磁器までというものである。カサ付近はワジで他の地域につながり、紀元前3千年紀の石組墓はウマンナールの広がりを伝える。施釉陶器や彩文土器、刻線文土器など落ちている土器もさまざまである。カサ周辺には岩絵が多いが、年代判定が難しい。1973年にはウィリアムソンと共にムサンダムの文化財踏査を行い、成果を1975年に発表した。ウィルキンソンなども調査を行った。1970年代はハヒート、ウマンナール、鉄器時代遺跡などの発見の時代であった。バハラから東方地域の踏査も行われた。イランで1974年にハーバード大学隊が調査し、若い参加者によりその後の調査活動が活発化したのに似ている。バンプール、シスターンとオマーンの彩文土器は類似し、交易による移動後、オマーンで模倣されたこともわかった。黒色スリップ彩ハラッパ土器瓶も発見された。バーミンガム大学の調査もあり、ヒーバ地域で同心円形の石組墓が紀元前3千年紀の土器を伴って発掘され、ウマンナール土器の広がりがわかった。鉄器時代ではジャムデッドナスル期の彩文土器が出土し、紀元前3千年紀初期のメソポタミアとオマーンの交流を示した。初期紀元前3千年紀から紀元前2千年紀の円形石組墓からは貝製リングやビーズなど装飾品が出土した。初期紀元前2千年紀の四角形泥レンガ家跡は集落の様子を明らかにし、2千マイル離れたワジ・スークと類似した遺物が出土した。こうして、1970年代のイギリス考古学者は100以上の遺跡調査を行ったのである。

Professor Maurizio Tosi (Bologna): The development of archaeological research in Oman

トシはオマーンで考古学調査を実施したが、目に見えるモニュメントだけでなく、その背後にある目に見えないモニュメントも研究した。イランのテペヤヒヤ遺跡調査は多くの若者を各地の遺跡調査に向かわせるきっかけになった。1970年代後半は生態研究、漁労研究、海の重要性を伝える航海研究が始まった。インダスとの関係を示すハラッパ土器、イラク人による最初の金発見、ダチョウの卵殻の発見もあった。今までイギリス、フランス、デンマーク、イタリア、ドイツなどから50の調査隊がオマーンに来た。イラン関係の考古学者が多く、インド・パキスタン関係の考古学者はほとんど来なかった。考古学調査は時間と莫大な費用がかかるため、限られたいくつかのヨーロッパの国が調査の中心となり、中でもドイツやフランスは現地に考古学研究所を開設した。費用をかけないなら、調査はしない方がいい。このような調査隊により遺跡の分布調査と地図に地点を落とす作業が続けられた。オマーン各地には銅鉱山があり、メソポタミアや東北イランへ運ばれたこともわかった。紀元前4千年紀の墓と集落が発掘され、大きな哺乳動物骨、亀骨、骨釣り針も出土した。墓の人骨は1才から40才くらいだが、21～25才の死亡が多い。

テル・アブラクやアラインの墓からわかったことも多く、ウマンナール文化の広がりも東方海岸まで帯状に延びることがわかった。出土したハラッパ土器の中には文字が刻まれたものや、貯蔵容器があった。ビチュメンや印章からは

西アジア考古学　第2号　2001年　139-146頁
©日本西アジア考古学会

紀元前3千年紀の交流を伝える。ラッセルハッドで発見された彩文土器はバルチスタン、イランとの交流や、直接的な航海ルートを示す。考古学からオマーンの文化的同一性を知ることができる。

Professor Serge Cleuziou (Paris): International connections of Bronze Age Oman

ラッセルハッド地域の考古学調査を実施している。ウバイド土器がオマーンの海岸から発見され、メソポタミアやバルチスタン、イランとの交流がわかった。紀元前3千年紀には交換と交易で、オマーンはエジプト、メソポタミア、インダスの文明と関係した。遠距離交易の他に、バルチスタンやサウジアラビアなどとの近隣交易もある。主な交易品は銅である。シュメール文書にマガンの銅鉱石が記されており、紀元前3千年紀にはメソポタミアに運ばれていた。ジャムデッドナスル期と同じ器形の彩文土器壷がラッスルハッド、ラッスルジン地域から出土する。貝製釣り針が青銅製釣り針に一斉に変化するのも銅の利用を示す証拠となる。ナツメヤシの種がテル・アブラクから出土し、西南イランからアフリカまで共通性をもつ文化が広がっていたのがわかる。天水が少ないから灌漑農耕をする。ウンマルナールの発掘ではシリアの土器が出土した。ラッスルハッドでは1979年に初めてインダスの動物文土器片を発見した。ラッセルジン遺跡からはインダスの製品が出土している。黒色と赤色の彩文土器、インダスの特産品であるカーネリアンビーズ、黒色彩文土器、骨櫛も出土している。木製船を上塗りするのに用いるビチュメンも出土した。これに対し、インダスやバハレンやサウジアラビアで発見されるオマーン製品はクロライト石製碗が唯一のものである。

Dr. Moawiya Ibrahim (Muscat): The contribution of Sultan Qaboos University to the archaeology of Oman

1993年、オマーン人教育のためスルタンカブース大学に考古学が設立された。1．最初に実施した考古学部のプロジェクトは大学近くのワジ付近の銅鉱石調査である。赤色の石が岩山肌に見え、ワジに丸い銅鉱石が落ちている。2．オマーン海岸の遺跡調査。ソハール、カルハットなどの分布調査を行い、石組墓や50cm程の層位内に堆積する石器などを発見した。3．カルハットの調査。両側を深いワジに挟まれた都市遺跡。海岸から離れた現在の道路に近い部分で住居の一部を発掘した。また、イブンバトゥータが述べたであろうモスクの調査も行った。内部に赤色顔料が現在も残る建物である。遺跡内には中国の青磁や染付が多く散乱する。4．サラーラの都市遺跡の保存修復をアーヘン大学と行った。サラーラでは周囲を墓に囲まれたモスクの発掘も実施した。水洗施設が付属していた。中国の赤絵なども出土した。5．オアシス集落遺跡をチュビンゲン大学と共同調査した。6．民族的調査。7．岩絵調査。8．ニズワの石に刻まれた文字の調査。9．ドファール地方の乳香調査を行い、報告書を作成。

Dr. Sophie Mery and Dr Vincent Charpentier (Paris): Around Suwayh: recent excavations along the coast of Oman

ラスッルハッドやラッスルジンの南側にあるスワイエ遺跡でオマーン最古の遺跡を発掘した。紀元前6千年紀中頃で、現在の海岸線のすぐ近くに位置する。砂地の遺跡には柱穴跡が多く発見され、調理用と思われる配石遺構もある。フリント石器、魚鱗、魚骨が出土した。紀元前5千年紀の遺構からは海亀骨、牡蠣貝やハマグリなどの貝、マングローブに共生する貝が発見された。紀元前3-2千年紀の遺構からは調理具に用いたビチュメンを発見した。紀元前6千年紀から使用された漁労用の錘も多く出土した。丸い石の両側に打ち欠きをしたもの、四方に打ち欠きをしたもの、長軸線上に刻線をいれたものなど、さまざまな形態がある。牡蛎貝から作った釣り針が見つかり、2つの孔が開いていた紀元前6-4千年紀のものもある。石鏃や鮫歯も出土した。近くの遺跡からダチョウ卵殻が見つかった。紀元前3千年紀の海水面は今より2 m高いことがわかった。柱穴跡と石積み壁の両方が発見された。土器、石製容器が出土し、返しのない未処理の青銅製釣り針は現地生産品である。紀元前4千年紀の漁労網錘の細長い石には3本の磨り跡線が残る。石製容器には二重圏文が連続して刻まれ、ジャランハマリンと類似。黒彩文土器はインダスとの交易を示す。紀元前4千年紀の墓も発見された。

Ms. Vivienne Sharp (Tunbridge Wells): Muscat: the architecture of a walled city

マスカットの都市内建築の移り変わりについて、1507年のポルトガル支配後を紹介する。1588年のマスカット全体地図で都市景観を説明し、1688年の都市図、1830年の図、1900年、1935年、1940年の写真で、最近あるいは現在まで残るもの、すでに変化したものがわかる。また、同じ位置にある建物の古い時代の様相から、町の移り変わりを追える。

Dr. Caroline Cartwright (British Museum): The coastal environment

ラッスルハッド沿岸地域の青銅器時代の環境を復元する。現代の植物と遺跡に残る遺物痕跡を比較し、ワジ、ラグーン、マングローブなど、当時の環境を復元する。人間生活と植物、動物は関連する。漁業については、青銅製釣り針と大小の魚骨、牡蛎貝など沿岸に産するもの。ラグーンの植物、乳香、内陸の香木も紹介。マングローブ地帯は特殊であり、貝、蝦蟹類、植物を紹介。ワジの植物、地下水、ナツメヤシ、動物、鳥など、現代の写真で可能性を示し、この地域の考古学資料としての発掘品が証拠になると

いう。

Mrs. Christine Mosseri-Marlio (London): Dolphins and turtles at Ra's al-Hadd

遺跡で発見される海亀、イルカはラグーンへの追い込み漁だったと考えられる。海亀は卵も食料であり、甲羅も利用される。イルカは食料であり、油はランプに使い、皮はボートや家として利用された。

Dr. Louise Martin (London): The role of the dog at Ra's al-Hadd

人間と動物、とくに犬との関係について述べる。青銅器時代遺跡内に骨、貝等が砂と層位的に堆積する。2 mmメッシュで採取した。Pl. 1地点では87/123と犬骨が多く、他は家畜、ガゼル、羊かヤギ、狐である。ある犬骨には16カ所に刃跡があり、これは食料だった証拠である。若い犬が多いようだ。犬の歯はヨーロッパ、中近東、サウジアラビアの犬と比較して小さい。狼ではなく、飼い犬の証拠である。Pl. 2地点では羊やヤギが多い。羊は塩水でも飲み、植物が少ない地域でも育つ。人間に有用なミルクを出すので、現在のように増えた。雄は食肉とする。別地点では71%が陸上哺乳動物だった。なぜ多くの食物があるのに犬も食べたのかという質問に、嗜好のためだろうと答えていた。

ラッスルハッド遺跡は1988年にジュリアン・リード（British Museum）が発掘し、出土資料を上記3名が整理して発表した。

Mr. Michael Gallagher (Pagham): Observations on the Halaaniyaat (Kuria Muria) Islands

島に住む鳥の生態を主に紹介。哺乳動物やイルカも紹介。

Dr. Mark Beech (York): What did they eat in early Eastern Arabia?

アラビア半島の紀元前6千年紀後半、ウバイド土器を出土する遺跡の分析を通して魚を食べたことを述べる。1996年統計では、食料の中で魚の占める割合がアイスランド、日本等の第1番目のグループに続いて、アラビアは第2グループに入る。アラビア湾は海水温度が高く魚が豊富である。現在の魚骨を比較資料とする。現在の漁労法は釣り、篭、網などだが、以前は不明である。クゥエイト、サウジアラビア、アラブ首長国連邦（ダルマとウンマルクウェイン）の4遺跡から出土した骨を分類し、魚の種類や大きさを比較する。ウンマルクウェイン出土の骨は小さい魚なのでラグーンで捕獲したと推定できる。なお、ダルマ島のC14年代測定値はBC4470年、BC5110年等である。

Dr. Peter Magee (Sydney): Foreign trade in Iron Age Eastern Arabia

アラブ首長国連邦シャルジャ首長国のムエイラ遺跡の住居群を1995年から発掘し、鉄器時代の東アラビアの外国との交易について、土器を中心に分析する。C14年代測定によると、第1期は紀元前1300-1100年、第2期は紀元前1100-600年、第3期は紀元前600-300である。紀元前1100年から遺跡数が増加し、潅漑が行われている。Coarser red素地とpainted fine素地の土器をXRF分析する。赤色粗素地は地元産とイエメン等の南東アラビア産に分かれる。容器として大瓶が運ばれてきている。彩文精製土器は1%以下で少なく、フジェイラ近くのSharmの土器の分析値に似ている。なお、遺跡から青銅器が多く発見された墓があり、鉱石を溶かし鏃等の製品を作った工房跡もある。香炉やラクダの土製像も出土した。発掘した建物のうち、長方形に並んだ部屋で囲まれた部分に2列の4本柱があり、この柱列の中央に漆喰の方形台のあるものがあった。ラクダ像はキャラバンルートであることを示し、ムエイラ遺跡は内陸の貿易センターである。類似の土器がテペヤヒヤから1点出土しているだけで、南東イランとの関係は非常に少ない時期である。

Professor Hans-Peter Uerpmann (Tubingen): The emergence of the camel

ラクダはいかに人に寄与したか。アル・ブヘイスのラクダの墓は骨の14C年代測定で紀元600年だった。紀元前5千年紀からラクダは発掘されている。飼育されたのはいつからか。ウンマルナール出土のラクダは飼育されている。テル・アブラク遺跡から出土したラクダ骨の比率は、ウンマルナール期、Wadi Suq 1、2、3期、鉄器時代1、2，3期、Ed-Dur期と新しくなるにつれ、少なくなる。ウンマルナール出土のラクダは、テル・アブラク出土より小さいが、これはウンマルナール出土ラクダが若いためだろう。飼育ラクダは鉄器時代2期に突然現れる。飼育された場所は南アラビア付近かもしれないが、今は不明である。絵画等から見ると、以前は1コブラクダと2コブラクダが同時にいたが、現在はアラブには1コブラクダ、アジアには2コブラクダがいる。

Mrs. Jocelyn Orchard (Birmingham): The work of the Al-Hajar Project in Oman

オマーンの山岳地帯オアシスの調査を行い、ニズワなど各地で遺跡を発見し、図化。

Dr. Roberto Orazi (Rome): The city and port of Khor Rori, Dhofar

南アラビアのコールロリ遺跡は紀元1年頃の地域史を復元するのに適している。1996年から調査を始め、文字資料や遺跡を紹介する。交易の中心となり、各地と海と陸の交易を行い、社会が形成されたことがわかる。1952年からアメリカ人が調査した。

Professor Alessandra Avanzini (Pisa): Incense routes and pre-Islamic kingdoms

コールロリ遺跡の都市復元を行う。当時の海面は今より

2 m高い。刻線文字から紀元1年とわかり、居住推定人口は200〜250人である。遺跡の近くでも香木がある。

Miss Rose Kerr (Victoria and Albert Museum): Chinese porcelain in the Gulf

中国陶磁器の生産状況の時代的概観をし、輸出の時代的変遷の特徴を説明。公式の貿易と、記録のない船舶による大量輸出があり、いかに運ばれたかが問題とそうる。唐代の20年間に500隻も作った記録がある。紀元1千年紀にはスリランカ付近まで中国船が行き、アラブ商人は中国まで往復した。鄭和の遠征は影響が大きい。交易の理由は香木、その他。文献には13世紀に青磁、青白磁、白磁、14世紀には青花が記される。ドーハ、メッカ等の町名が文献に見える。1981-1982年にモニクケルヴランがソハールを発掘した。ソハールは中国の文献にも見え、内陸オアシス都市と結ぶ海港である。東アフリカ、インドとも結ぶ重要な町であり、12世紀以降国際都市に発展する。発掘で出土した中国陶磁器は9-20世紀のものがあり、青磁、青白磁、白磁がある。11世紀には白磁に変化する。10-11世紀の白磁は邢窯、定窯があり、長沙窯もある。12世紀前半は少なくなり、青白磁である。12世紀の南中国、北ヴェトナムの黒褐釉がある。12世紀の鉄班白磁は少ないがある。後青磁が主となり、染付は16-17初が主、19-20世紀の染付は大量にある。粗染付も多く、19世紀には東アフリカまで広がり、19-20世紀初のプリント染付もある。

中国陶磁器の一般的な文様は年代を与える資料である。19-20世紀は中国陶磁器が多いからソハールが貿易センターとわかる。16-17世紀は少ないからソハールは中心ではなかった。このように一つの遺跡で変化を見ることも重要である。模倣も検討事項である。1つの破片でもその裏にある様々なことがらを示す。

Mr. Stephen Kite (Newcastle): The poetics of Oman's traditional architecture

集落、門、塔、農地、山、ワジ、木、広場、など環境のなかで総合的にみて、全体としての機能を考える。例えば広場の中央に木がある。木は宇宙である。木の影の利用や家としての利用もある。復元するときに関係を無視できない。家は、明るさと暗さ、スムースとラフ、門の開閉、など対比の美しさがある。ドアーと壁の一体性、土地景観や地理なども問題である。全体の中での配置、個々の機能、建築は住む空間だけでなく、時間も含む。建築とは何かを問う。

Professor Paolo Costa (Bologna-Ravenna): The Friday mosque of Qalhat and its decoration

カルハットはスールの北22kmにあり、ワジ南側に沿って山から海岸まで広がる都市遺跡である。軍事都市、港市である。ペルポリアスがカレオスと呼んだ。マルコポーロや1328年にイブンバトゥータが訪れた。14世紀初に建てられたマウスレウム・ビービー・マリアン建築以外はすべてポルトガルが破壊した。ビービー・マリアンは平面方形で手前と左右に入口があり、奥壁は窪む。入口部上にはムカラナスがある。ボールト構造。水タンクの近くにあるこの建築は、イブンバトゥータがモスクと呼んだが、モスクではない。一般にモスクとマウスレウムは隣接して建てる。ポルトガルの記録にも間違いがある。壁内に焼き物があり、施釉タイルが貼られたというが、その痕跡はない。ポルトガル兵士は火を放ち、完全に建物を燃した。イブンバトゥータもモスクとマウスレウムを取り違えている。2つの建築だけが残ったという。水タンクは使用するために残った。しかし、多くの建物は自然に崩れていったのではないか。ニズワの今のモスクの壁には、陶磁器皿が装飾品として貼られている。これは東アフリカに広がる習慣であるが、アラビアでは希なことである。したがって、大モスクは別の場所にあると思う。

◆Seminar For Arabian Studies（7月20-22日　ロンドン大学UCL教室）

第33回年次研究会。アラビア半島に関する歴史的考古学的研究集会である。

Dr. Ibrahim Al-Balooshi (Al Ain): Al Ain region as an outpost of the Sasanid Empire in the Arabian Peninsula in the 4th and 5th centuries AD

4-5世紀のササン朝の植民地としてのAl-Ainを説明する。アラインはササン朝の支配下にあり、9世紀はスンニー派になる。現代の景観をスライドで写した。

Dr. Joseph Elders (London): The monastery on the Black Island? Excavations on Sir Bani Yas Island, Abu Dhabi (1993-2000)

アブダビ、ダルマ島にある修道院発掘の紹介。40m四方の台形囲い内にL字形の建物があり、漆喰の弦巻文装飾で飾られる。漆喰は現地産だろう。入口は南東隅にある。5-6世紀ころか。

Dr. Tom Vosmer (Perth and Fremantle): Building the reed boat prototype: problems, solutions, and implications in third-millennium ship building

紀元前3千年紀の葦船建造について。シールに船図がある。炭化カルシウムを混ぜて、ビュチュメンが塗られる。実験的に葦船を造り、工程復元を行った。

Mr. Abdulrahman Al-Salimi (Durham): Some aspects of Omani history during 10th and 11th century

10-11世紀のオマーンの政治史ではIbadiの考えが与えた影響と役割が大きい。オマーンのイマームの年代順番を明らかにし、海上ルートとの関係があるという。これに対

し、イラクの政治的落ち込みよりも、マスカット、カルハット、サラーラなどの経済的発展、すなわち北より南の発展がペルシア湾から紅海に海上ルートが移動した原因だという会場からの意見があった。

Dr. Axelle Rougeulle (Ste Adress): Sharma, an 11th century emporium of the oriental trade on the South Arabian coast

11世紀のSharmaを中心にイエメン南アラビア沿岸の貿易を、1千年紀の前イスラーム時代の遺跡やシフル、シャルマの出土品を紹介しながら述べる。シフル採集品のスライドには9-10世紀の中国青磁、9-11世紀のスグラフィアット、白釉陶器、青緑釉陶器があった。シャルマは前イスラームに栄え、再び10世紀末11世紀初に栄える。イドリーシーは12世紀にシャルマについて述べている。トレンチ発掘したが、11-13世紀のイスラーム陶器が多く出土し、スライドにはスグラフィアット、青釉陶器、緑釉陶器、中国の11-12世紀の青白磁、青磁、それに土器が見られた。シラーフからの移動の可能性、居住者がベドウィンで、彼らは漁労者でもある、港によって水を得るのがこの地に寄る目的である等と一般論を述べる。

Mr. Samer Traboulsi (Princeton): Arwa bint Ahmad and the politics of religion

イエメンの政治的状況を取り上げ、ファティマ朝の影響に対する反応について述べる。

Dr. Claire Hardy-Guilbert (Paris): Archaeological research at al-Shihr, Yemen (1996-99)　シフルの調査を1996-99年に行う。シフルはムカラ東方の9-10世紀の都市として、ムカダシー等多くの人によって言及されている。漁労が主で農耕はなく、ラクダや山羊がいた。フランクインセンスはシバ女王の時代だけでない。13-16世紀、ポルトガル人の時代もハドゥラマウトの入口として重要である。海に面し、背後に大きなワジがある。ジュルファール、ソハール、サイフット、シフル等を比較するとよい。シフルの今の町中にブルドーザーで削った小丘に層位が見えた。トレンチを入れると、7層が発見され、初期イスラームの層位もあった。11-12世紀頃の層を平面的に広く発掘し、漆喰塗り床も出た。スライドには、黄釉上鉄彩陶器、青緑釉陶器、スグラフィアット、イエメン陶器、褐釉陶器、インド土器、中国長沙窯碗、ウマイア朝エッグシェル土器、アラビア半島産彩文土器、13世紀末から14世紀の中国青磁、16-17世紀の中国染付、その他に琥珀、香木、大魚骨等が見えた。

Dr. Francine Stone (Oxford): Page Eleven of H.C.Kay's Yaman its early mediaeval history? Removing the question Marks

アラブ文献を使うことは考古学調査に有用であるとし、ティハマ海岸のルートを説明する。アデンから2本の道がある。19世紀の地図によると、1日行程で寄港地のムーサ、モハに行く。アデン付近からティハマ海岸のルートや町の名から現在どの場所かを復元する。

Dr. C.G.Brouwer (Amsterdam): Unless the Basha wants it: military materials sold by the Indians and Dutch in the market of Al-Mukh during the Kasimid Revolution

イエメンはインドを向いて生活している。16世紀はオスマントルコがイエメンを支配し、軍隊が武器などを売った。17世紀はオランダが来た。インドからも船が来て、金や鉱物を求めた。コーヒーを求めたのではない。インドのスラートやグジャラートへ運んでいる。鉄や中国陶磁器は大量に安くモカに運び込まれた。スラートからは硫黄が積まれたが、イエメンには火薬として入らず、エジプトに運ばれていった。これはオスマントルコの政治的策略である。

Mr. Nadim Hosny Salameh MA (Beirut): Water right in 16th century Hadramawt? one question, two answers. The legal opinions of Ibn Hajar al-Haytami and al-Bakri al-Siddiqi

ハドゥラマウトの16世紀の水を巡る問題を扱う。

Prof. Dr. Valeria Piacentini (Milan): The Tibis, Mahmud Qalhati, Ayaz from 'Uman… and a South Arabian origin of the royal family of Hormuz

ホルムズの南アラビア出身王家のルーツを探る。14世紀後半に軍隊を支配し、1470年没の王が軍隊システムを整備し、1501年からポルトガル支配になる。

Dr. Birgit Mershen (Al-Khod): Observations on the archaeology of rural estates of the 17th through early 20th centuries in Oman

オマーンのイスラーム時代考古学が進む。土地利用についても判明しつつある。パスタ、ウィルキンソンなどが1970年代から潅漑を中心に後期イスラーム時代17-20世紀の研究を進めた。ワディ・バニ・ハルースなどの例をあげ、潅漑システムによる集中的土地利用であること、テラス造成による農地で椰子、マンゴー、ココヤシ等を育てる。農耕の発展は王家が指導して進められた。

Prof. Dr. Vitaly Naumkin (Moscow): Myth and eroticism in Socotran folklore

ソコトラ島の民俗を詩から探る。

Mr. Bader Ben Hirsi: The Englsh Sheikh and the Yemini Gentleman (video)

英国人が初めて訪ねたイエメンを楽しみ、英国に住むイエメン人二世が母国に戻って戸惑う姿を通して、イエメン文化を興味深く紹介する。

Dr. J.McCorriston (Ohio), E.Oches, S.Banerjee, R.Bursheim & D.Walter: Palaeoenvironment, environmental

change and human ecology in mid-Holocene Hadramawt: the RASA project

ハドゥラマウトの自然環境を復元する。花粉分析等を行う。

Mr. Vincent Charpentier (Paris): The lithic industries of Ra's al Hadd (Oman)

ラッスルハッド地域の石器生産について述べる。紀元前6千年紀～紀元前3千年紀の石鏃やスクレイパー等の製品と原材料が比較的近くで発見された。ウンマルナールの時期は30km も離れた場所から原材料を運び、製品を作っている。

Prof. Dr. Ali Tigani ElMahi (Al-Khod): Dhofari traditional pastoral groups in Oman: a parallel of an ancient cultural ecology

ドゥハール地方の雨期、乾期の自然状況と、鉄器時代の生態を関連させて推定する。

Dr. Sophie Mery (Paris) & Dr. Walid al-Tikriti (Al Ain): Results of two seasons of excavation at Hili Tomb N (UAE)

ヒリで紀元前2千年紀の墓を掘る。円形壁内に仕切があり、多くの遺体が積み重なって発見された。一部の遺体は焼かれている。土器、石製容器も出土した。

Dr. Margarethe Uerpmann (Tubingen): Remarks on the animal economy of Tell Abraq (Sharjah and Umm al-Qaywayn, UAE

テル・アブラクの動物経済をウンマルナール期から紀元前300年まで検討する。発掘されたテルから層位的に採集された羊、山羊、牛、ラクダの骨の割合を出し、飼育動物と野生動物を問題とした。

Mr. Carl Phillips (London): Some thoughts on the long-term settlement of Kalba and Khor Kalba (Sharjah, UAE)

カルバ、コールカルバ地域で墓の調査を続けている。紀元前3千年紀のウンマルナール型の墓もある。その前後の時期の墓もある。メソポタミアの土器、イランの石製容器も出土し、他地域と交流していたことを示す。幅広い壕内の厚い泥壁で囲まれた住居について説明する。

Dr. Christian Velde (Ras al-Khaimah): Wadi Suq and late Bronze Age, a re-examination of the 2nd millennium BC in the UAE

紀元前2千年紀後期青銅器時代のワジ・スーク期は、さらに前中後の時期に分類でき、分布地域も分ける方がいい。土器、青銅器やクロライト容器による再編年案を提示した。

Dr. Peter Magee (Sydney): Excavations at Muweilah, Sharjah, UAE (1997-2000)

ムウェイラー遺跡の発掘。住居室内から南アラビア文字を数字刻んだ壺が出土した。現地産ではなく、運ばれたものか。ペルシア湾岸で初めての出土である。青銅生産を行った部屋も発掘した。

Dr. Paul Yule & Charlotte Bank (Heidleburg): Amlah in al-Dhahirah (Sultanate of Oman): Late pre-Islamic cemeteries

前イスラーム期後期のアマラの墓を1997年から発掘している。25基の墓は3群に分かれる。平坦な天井石で覆い、入口は東向き、人骨が残り、土器、石製容器が副葬されている。ビーズなどの装飾品は少ない。

Dr. Piere Lombard (Lyon): The Late Dilmun snake sacrifices from Qal'at al-Bahrain: new evidence and interpretations

バハレン、カラートバハレンのディルモン時代宮殿と推定された場所から土器鉢が発見され、土器蓋を開けると中にとぐろを巻いた蛇骨があった。室内の床面に穴があり、穴内に土器が納められ、その中に蛇が入れられていた。土器は500BC 頃の一般的なもので特殊な土器ではない。土器内には織物の痕跡が残る。なぜこのように納めたか。生贄か。土器に蛇の文様を貼り付けるのと同じことか。聖なるものとして蛇を扱ったのか。

Dr. Moawiyah Ibrahim (Al-Khod): Monumental tombs and their inscriptions from Nizwa, Oman

ニズワの墓地群にあるいくつかの墓には墓碑があり、アラビア語が刻まれている。コラーンの文章が多い。スライドを見ると墓地からは最近の陶器まで出土している。

Dr. Hanne Schonig (Halle): Notes on the practice of tattooing and the use of indigo among the Bedouins in Wadi Hadramawt

ハドゥラマウトのベドウィン女性のインディゴ使用と刺青についての調査報告。生活風習のなかで、どのように使われているかを説明。

Dr. Selma al-Radi (New York): Finishing the 'Amiriya madrasa in Rada', Yemen

サナー南東120km にあるラダでアミリア・マドラサを修復した。その修復方法を紹介し、イエメン人の修理技術者も現場で養成したという。今、観光に訪れる人も多い。

Miss Caterina Borelli & Miss Pamela Jerome: The Architecture of Mud (video)

泥レンガ造り建築についてのビデオ。製作工程から完成した建築の特徴などを示す。

Dr. Hani Hayajneh (Irbid): First evidence of the Babylonian King Nabonidas in the Old North Arabic inscriptions

Dr. Ali Ibrahim Ghabban (Riyadh): Akrakomi: Al-Hijir port (Madain Salih) on the Red Sea coast

アカバから南へ400kmほどにあるアカラコミは、ローマ、ナバティアの港として文献に名が見える。海岸から10km東に入った地点に遺跡が残る。大理石を用いた神殿、大理石で囲った水タンクがあり、ローマ、ナバティアの土器片が発見された。現在、雨期と夏はサバハの道は使えない。昔の道路跡も残り、海まで続く。貝、土器片、青銅器、ステアタイト、ミルストーンも道路近辺で発見され、1世紀BC頃の遺物と推定された。アクラは地名で、コミは村あるいは港を指すと推定している。

Mr. Tara Steimer-Herbet (Paris): Results of the excavation done in Jabal Ruwaik and Jabal Jidran, Yemen (1999)

イエメンのルワイクとジドゥランにある墓地群の発掘についての報告。

Mr. T.J.Wilkinson (Chicago), C.Edens & G.Barratt: Hammat al-Qa: an early town in southern Arabia

サナーの南、ダナーの北にある南アラビアのプレ鉄器時代の遺跡、ハマットアルカは初期の村落遺跡である。C14によると3千年紀BC後期から紀元前2千年紀初期頃の年代であり、5 haの広さがある。農耕村落であろう。航空写真と地上測量によって、周辺平地から盛り上がる独立丘上の平坦面にぎっしりと家跡が残ることがわかり、周囲の壁と門まで位置が推定できる。発掘は部分的であっても、全体的な家の形態などが判明する。村落の全体像と周辺の農業について復元することが可能である。

Dr. Iris Gerlach (Berlin): New Light on Sabaean burial customs illustrated by the Cemetery of the Awam temple, Marib (Yemen)

マーリブ、アワム寺院のサバの墓から見る埋葬習慣を取り上げる。文字が刻まれた墓も多いが、再利用された墓や後に刻まれた文字もある。

Dr. William Glanzman (Calgary): Results of the first geoarchaeological investigations at the Mahram Bilqis, Marib (Yemen)

マーリブ、マハラムビルキス遺跡において、ground-penetrating raderを使用して地下探査を行ったところ、大きな円形状壁の一方向に小さな方形壁が付着する地下の様相が判明した。

Prof. Dr. Manfred Kropp (Beirut): Individual public confession or stereotype and stylized document of lawsuit? The expiation texts in ESA

Dr. Serguei Frantsouzoff (St Petersburg): The cult of the god Sin in raybun and in Shabwa (epigraphic evidence)

1世紀BCの石に刻まれた碑文から家系を推測する。

Dr. Mohammed Maraqten (Marburg): New evidence of infanticide in ancient Yemen

子供を殺す習慣が前イスラーム期にアラビアに存在したかどうかを、骨に刻まれた文字から論じる。

Dr. Stefan Weninger (Munich): Two inscribed Old South Arabian sticks in the Munich Collection

ミュンヘンにある古南アラビア文字を紹介し、貿易品に付けた荷札と推定した。発表後、サナーにこの破片に接合する資料が所蔵されているという指摘があった。

Prof. Dr. Walter Dostal (Lisbon): The saints of the Hadramawt

ハドゥラマウトの聖人について。

Mr. Francois de Blois (London): Arabic hanif and Syriac hanpa

アラビア語のハニーフという言葉の意味の変化を説明した。

◆ The Archaeology of Bahrain: The British Contribution（7月24日　ロンドン大学SOASブルネイギャラリー）

展覧会「Traces of Paradise, the Archaeology of Bahrain 2500BC-300AD」に併せて開催された。

Mr. Michael Rice: The rediscovery of Dilmun

1816年遺跡が発見されTomが6月間滞在した。1887年の絵画に描かれた遺跡からは、どのようにヨーロッパ人が遺跡を見たかが推測できる。19世紀後半研究ではなくスパイとしてバハレンに行った人もいた。後にBarbar templeと呼ぶ遺跡も発見された。1890年アメリカ人が遺跡を訪問した。1900年代になって最初の科学的調査が実施された。ピートリーはエジプト調査と同時にバハレンで広域関連調査を行った。1925年バハレン、ハムリアが刊行された。ディルムン、バハレンは楽園という考えが生まれた。1933年ディルムンの発掘。ビビィは1950年代から調査を始めた。青銅器時代のエジプトやメソポタミアとの関係が取り上げられた。その後、サールの10年間の発掘で青銅器時代研究が進む。1980年代にはヨルダン人も調査した。

Professor Michael Roaf: British Excavations at al Markh

1970年代に英国人考古学者の活動があり、1975年にバハレン島西側南部のアルマーフ遺跡が発掘された。石灰岩、土器、魚骨等が出土し、紀元前4千年紀と推定された。1975年発掘でpit内から魚骨が出土し、2カ所からサンプルが採取された。上層から31,000片採取し、のこぎり状の歯が多かった。下層から99,926片採取し、Sparidaeが多かった。これは漁法の違いか、季節の違いか。他の遺跡と比較すると種類が違う。遺跡の前期フェイズからは、ほ乳類骨が非常に少なく、貝、真珠貝が出土。後期フェイズからは、大

量の山羊骨が出土し、真珠貝、venerids が出土。種類を比較すると、初期フェイズは発掘量11.92立方メートル、魚骨は大量にあり保存状態がよく、ほ乳類は非常に少なく、食用の貝で一般的なものは真珠貝と murex、後期フェイズは発掘量14.17立方メートル、魚骨が大量にあり保存状態は悪く、ほ乳類は山羊が多く、食用の貝で一般的なものは前期と同じである。土器は後期、または後ウバイド期で、紀元前4千年紀頃で、単純な黒線文の土器である。紀元前4、5千年紀頃、バハレンやサウジアラビアでウイド土器が発見される遺跡があり、アラビア半島には遺跡数が多い。ウル商人の海上交易を示すか。土器薄片観察をロバートメイソンが実施中。網錘は出土しない。C14年代測定はしていない。

Professor Michael Roaf : Excavations at Diraz East

バハレン島北側のディラーズ東遺跡の初期ディルムンと後期ディルムン・バルバル土器を取り上げる。1976-78年に遺跡を発掘し、列柱が並ぶ神殿の形態や墓を明らかにした。また、アーリ東遺跡では700BC の墓を2基発掘し、第2号墓からは人骨70体が出土した。

Dr. Robert Killick, Dilmun at the turn of the millennium : living at Saar

1989年から10年間、サールで紀元前3-2千年紀の村落を広範囲に発掘した。石壁の保存状態が良く、家跡と道がきれいに出土した。土器編年1期は紀元前2000年でカラートバハレン2期にあたり、2期は紀元前2000-1950年でカラートバハレン2b期にあたる。その後の紀元前1950-1850年はカラートバハレン2b/2c期、さらに紀元前1850-1750年と続く。ビチュメンビーズが出土したが、カラートバハレン出土品と違いがあり、イラン産の可能性がある。小さな島内の遺跡でも、産地が違う製品が運び込まれている。サール遺跡は墓作りの人が住んだ特殊な村落であったか。

Dr. Robert Carter : Restructuring Bronze Age trade in the Gulf

紀元前3-2千年紀のサール遺跡出土の土器にはワジ・スーク土器、ハラッパ後期土器がある。イランやメソポタミアの土器がある可能性もある。ハラッパ土器はグジャラートとの関係があること、交易で東方地域との関係が強いことを示す。紀元前2千年紀もワジ・スークの土器、ハラッパの土器が出土する。墓形態がウンマルナール墓と類似しており、銅の交易の問題もある。

Dr. Archie Walls, Arad fort : its restoration & foreign relations

アラド砦はバハレン島西北に接するアラド島にあり、1635年にポルトガルによって建造され、最近修復が完成した。

参考文献

佐々木達夫　1998「West Asian Archaeological Conferences, 1997-98 held at Kanazawa, Oxford, London and Sydney」『金沢大学考古学紀要』24号　243-252頁。

佐々木達夫・佐々木花江
金沢大学文学部
Tatsuo & Hanae SASAKI
Kanazawa University